

く案内の勞を取られたり、博物館への途上、古瓦を數多拾ひて友と共に競ふ、場より出でて大佛に入る、それより二月堂に至り晝飯を終る、春日神社もそこ／＼に、櫻井向かつて發足す猿澤池の畔より南へ初瀬街道を歩む、「おびとけ」「櫟本」を過ぎて猶も進みたるに、明月東の山に明るく遠山はパアブル色に霞み村の白壁のみ、際立ちて白く見えたり、枯木の細々と立てるも哀れに淋く、かう／＼と散る落葉にも旅の淋さを感じたり、坂の路は農家の屋根にて絶え寒き風耳を切りて水田の中に光る月も、物互えたる一幅の好圖パノラマの如く右に開き、快哉の語にも淋の情を起さしめたり、「柳本」といふ村に入る、あたりは夕靄に包まれて、三輪町の燈火のみコパルト色の中に點々として見ゆ、三輪神社も見ずに町を過ぎ、橋際に休みたり、山の端の明月皎々として物凄く、水の音のみ響き渡れり：：
櫻井の町に着きたるは夜の十一時頃にして、寢に就きたる後は何事もわからず。

三

目覺むれば日光高く上れるに驚き、直に多武峯五十町の坂路を登る、頂上に着きたるは十一時過ぎにして老杉森々たる中を出づれば朱塗りの樓門麗しく、皇后陛下も御臨幸せられしとか、二三日前には雪七八寸も積りたりといへば、その寒さ知らるべし、少時スケツチして晝飯を終り、畝傍へと立ち出でて下山す、山上よりの眺望、吉田氏の畫かれたる「峯の眺め」その儘にして、日數あらば畫きしにと、殘念がれども詮方なし、岡寺と

いふ名高き寺もその儘にして、檀原神宮を拜す、質素なる社内寂として音無し、途中或る村落の美しき構圖を見たれど、次の旅を期して進みたるなり、畝傍驛に着きたるは四時半にして、今列車の出でたる後と聞き、六時十分の下りに乗る、十五夜の月互えて、はるか三笠山上に明るし、旅の疲れにうと／＼と眠れば、月はなほも窓外に高く、風の音のみ物凄し。(完)

——明治四十二年十二月廿七日記す

おのれの告白〔上〕

長谷川利行

一條の路にまばらな松林があつて家が二三軒、それへ雪が降つた丁度それが元旦であるこれで新年の雪と言ふ御題に叶つた歌でも詩でも文でも作れるわけである無論畫も描ける、おのれはそれを眺めて詩も作つた歌も文も作つた畫も描いた、と同時に文章家になり畫家となつた、とまたおのれは馬鹿々々しくなつた。文章家は何んだ、詩なり歌なり文なり作つてこのおのれを慰安せしめるのはどれほどのエナーヂがあるか、先づこゝ反促した、するとおのれはどうしても自然畫の側にたちてゆくんだ、畫家——藝術家になるのは天職だと信じるやうになる、何んだかつくづく描いた新年の雪といふ御題その儘の水彩畫を見て一しほの快心を覺へた。

仰々しく以上の始末をならべたてるのは何の理由もない、歌も詩も文も作つたが描いた繪畫が痛切におのれに見えがしたのである。

おのれに元旦は年賀狀がまい込んだ、無慮八十枚のハガキは大

丈夫あつた、いろんな文句も見出した、達筆家もありがたかつた、御自慢のあつさりした水彩畫の肉筆賀状等はよろこばしかつた、がおのれは一番うれしかつたことはおのれの常々崇拜ぢやあ無い先輩先生として居る大下先生から戴いた賀状である、第一今年四十三年の一日から嬉しいことであつた。おのれは賀状を給つた先生へ厚く御禮申して居た。

思ひ出の儘

神奈川

加須美生

或る人曰ふ、「冬は色彩に乏しい」とそれは自然の觀察が不充分から出る言葉だらうと僕は思ふ、なぜなればさう云ふ人の寫生畫は、きつと色が單調で有らう、もし其の畫に種々の色が入つてゐれば、それは充分なる自然の觀察から出る色でなく、唯無意識に色を入れる丈で、自然がどうしても唯其時其畫が一寸キレイに手際善く描ければそれで善いと思つて居るに違ひない、少しく觀察を密にすれば、盛夏の濃い緑の中にも、其草特有の色が種々見えるに違ひない、わけて、秋は言迄もなく、冬の淋ひしい枯草の一樣に黄色に見ゆるも、つぶさに觀察したならば、乏しい處ではない、非常に面白い多くの色を見出す事が出来るだらうと思ふ、故に、いやしくも彩筆を手にする人々は、日常目に觸るゝもの何によらず心懸けて觀察して、其所謂審美眼を養成して置くことは急務であらう。

裏の竹籬

相模

枯村生

椽先から十間許りが畑で、それから先は四十五度位の勾配になつた草叢で、それが中頃から前は疎らに、奥の方へと段々に茂

つた竹籬である、家主が何時にも掃除しないので、竹の古葉が四五寸も積つて、前の枯芝の上迄一面に被さつて居る、毎朝八時頃になると前の畑の眞中頃から籬へかけて、一面に日光を浴ひるので、畑に取残された菜でも籬の落葉でも皆んな白銀色にきら／＼して居る、草叢から籬へかけては丁度エロイオーカ

寫生

日比谷

T R

私は今同窓のMさんと目白の田舎道を歩ひて居るのだ、深く喰ひ込んだ車の跡にそふて行くと、一丁程で冬枯のした雑木林の方に行く、車の跡は雑木林の横から曲つて遠く下る阪道に續く、阪道の下は刈り取られた畠に續ひて遠く早稲田の方迄白く長く一線になつて居る、道の兩側には秋から未だ其生命をつないで居るイザケタ短い草が、葉の上に白くほ／＼りをのせて、百性の荷車から落ちた藁の間に、其青黒い短平な葉を見せて居る、二人は此道に別れて峠道にそつて土手の下へ出た、土手の下には瀛車の窓から、ほうり出された辨當のからが、其蓋と一間程離れて、土手の中途にある切株にひつかかつて居る、二人は土手の前の細徑に晝架を立てた、時々電車や瀛車が頭の上を氣味の悪